梅崎春生　無名颱風

［やぶちゃん注：昭和二五（一九五〇）年八月刊『別冊文芸春秋』第十七号及び、同年十月刊の同雑誌第十八号に連載され、後、同年十一月刊の月曜書房の作品集「黒い花」に収録された。

底本は「梅崎春生全集」第一巻（昭和五九（一九八四）年五月刊）に拠った。

なお、梅崎春生「生活」の私の冒頭注を参照されたい。

傍点「、」は太字とした。

一部に注を附した。

本篇は既にブログ版として二部に分けて、「一」から「十」及び、「十一」から終章までに分けて公開したが、今回はサイト一括版としてPDF縦書版でアップする。その際、ルビ及び傍点も原文通りに再現した。］

無名颱風

一

昭和二十年八月下旬、かなりの風速をもった颱風（たいふう）が、九州南西部の一帯を通り抜けた。終戦後、とは言っても、まだ数日を経たばかりだから、しゃれた名前のつきようもない。無名の颱風である。

この颱風が、どんな性質のものだったのか、どこから来てどの方面へ抜けたのか、私は未だによく知らない。知るよしもない。

ただ私は当時、その風域の一端にいて、それが狂暴に地表を擦過し、物と人とを傷つきやぶる状況を、つぶさに体験した。地点によって異るだろうが、私の場合この颱風は、薄暮の一刻にとつぜん始まり、夜中を荒れ通し、翌朝の晩方に終った。この一夜の印象は、その時おかれた環境のゆえもあって、今なお私に鮮烈である。

かなりの風速、と、さきに書いたけれど、控え目に記憶を探ってみても、やはりそれはかなり以上の風速だったような気がする。昭和六年の夏北九州をおそった、風速四十五米の颱風を私は知っているが、身に迫る兇暴さにおいて、それと同程度の、ある瞬間にはそれ以上のものを、この無名颱風は具（そな）えていたようだ。身を倚（よ）るすべもない、ふつうでない状況が、あるいはそれを実際以上に、私に感じさせたのかも知れないが。――

［やぶちゃん注：敗戦直後の大災害を齎した台風としては枕崎台風（昭和二〇（一九四五）年台風第十六号）が有名だが、それは九月十七日に鹿児島県川辺郡枕崎町付近の上陸で、ここに描かれる台風ではない。サイト「四国災害アーカイブス」の「昭和20年8月の台風」に、昭和二〇（一九四五）年八月二十五日として、現在の香川県三豊市高瀬町（たかせちょう）（リンク先に国土地理院の地図有り）、当時の当地、旧三豊郡比地二村（ひじふたむら）の村役場「日誌簿」に、同日、午後四時より夜半にかけて暴風雨が襲った旨の記事があるとある。当該ページには原資料へのリンクがあるので、それで見ると、「高瀬町史　通史編　現代」の「三　災害の発生」の冒頭に、「暴風雨の災害」と項立てし、『終戦の年の比地二村役場『日誌簿』八月二十五日の欄に、「午

後四時ヨリ夜半ニカケテ暴風雨、敵ノ占領上陸ヲ明日ニ控ヘテ神風吹クカト疑カハシムル計リナリ』とあった（この記載もなんとも哀しいが、香川には崇徳院の白峯陵がある。昭和天皇は開戦に際し、ここに崇徳院がアメリカに加担せぬことを祈って遣使を遣わしていることを思い出し、寧ろ、荒ぶるその御霊の歓喜を想起したことを告白しておく）。当時の村役場があったのは現在のJA香川県比地二支店（グーグル・マップ・データ。以下同じ）であると、ウィキの「比地二村」にある。以下の「二」の最初のロケーションは鹿児島駅で、敗戦解除直後（当時の残務処理・物資分配などから考えても十七日以降と考えてよかろう。「二」に無蓋の鹿児島駅のホームで「二日も三日も待ってる人だってある」という描写があるからには、十八日以降としてもいいと思う）である（そのシーンの初めは炎天下である）。「三」の頭では、「都城を過ぎる頃から、列車をおおう空模様が、あやしく乱れ始めてきた」とあり、「六」で雨が降り始め、「九」の宮崎の高鍋駅で既に風雨激しく、川が氾濫しているという記載がある。而してこの「一」の描写を見ると、作品後半の台風の襲来と通過は凡そ十二時間で、その時のロケーションは高鍋駅近くである。鹿児島駅と旧比地二村役場の位置は直線で約四百十九キロメートル離れている。さらに、途中に出る都城駅と先の同村役場を直線で引くと、そのルートの真下に高鍋があることが判るはずである。されば、実際に敗戦直後に発生したこの台風がこの「無名颱風」のモデルであると断じてよい。なお、調べてみたところ、株式会社「気象サービス」の「気象トピック」の「終戦の日」によれば、当時のラジオ放送の天気予報は同月二十二日から再開されたとある。昭和一六（一九四一）年十二月八日のハワイの真珠湾攻撃を境としてラジオの天気予報は放送が禁止されていた。実に三年八ヶ月振りの天気予報であったが、ちゃんと報じられたとすれば、まさにこの台風はその予報の中で伝えられてあったはずである（と思ったが、以下の引用にあるようにそれはなかったと考えた方がよいようである。因みに、敗戦の日の天気図がサイト「SORA　2016年8月号」の「気象アーカイブス（17）　終戦の日の空は本当に晴れていたのか？」で確認出来る）。どうも気になって、さらに調べてみたのだが、妙な記事が見つかった。「いであ株式会社」のサイト「お天気豆知識」の「終戦と台風」である。そこには『終戦後の最初の台風』（リンク先に『終戦後最初に上陸した台風の経路図』とキャプションした日本地図がある）『は、豆台風でしたが』、『終戦の日の約』一『週間後、ラジオで天気予報が再開された翌日の』八月二十三日『未明に房総半島に上陸して関東地方を北西方向に通過しています。気象観測は空襲で破壊されていない気象官署で行われていました。しかし、海上の観測は皆無です。現在でも海上の気象観測は航行中の船の観測が頼りですが、当時は航行する船舶はほとんどありませんでした。さらに通信回線も完全に復旧しておらず、離島からの情報は入ってきませんでした。このため、台風が接近していることがわからず、まさに不意打ちだったようです』とあったからである。この台風は小さいし、その進路は明後日の方角で、鹿児島・宮崎・香川に影響を与えたとは思われない。梅崎が台風を捏造したというなら、香川の記録がおかしなことになる。同年同月の「中央気象台月報」を国立国会図書館デジタルコレクションで探してみたが、ない。もし、この昭和二〇（一九四五）年八月下旬の天気図を見られた方は、御教授戴けると幸いである。」

その当時、とにかくすべてのものが、ひどく混乱していた。交通状態、人の往き来、そんなものが何もかも。――ことに南九州一円においては、他の地方にくらべても、混乱状態は一段とひどかっただろう。所在の交通機関は、沖縄米空軍にさんざんたたかれていたし、また内地の第一線として、一部隊の数もおびただしく、やがて連合軍が鹿屋（かのや）に進駐してくるというので、それらがほぼ一斉に解散してしまったからだ。

だからそこらの街道、停車場、波止場、汽車や牛車やトラックに、復員荷物を背負ったさまざまの兵士が満ちあふれ、動き廻り、右往左往していた。晩夏の烈日のもとで、それらはまるで巣をつつかれた蟻のように、右へ左へ無目的な動き方をしていた。もちろん個々をあたれば、各自の故郷にむかって動いているに違いないのだが、全体としては、錯雑したでたらめな蠢きにしか見えなかった。

それらが整然とした動きをとらないのは、いきなり軍務から解き放たれた情緒の混乱と、とにかく一刻も早く故郷へ戻ろうという焦躁で、それぞれが方途を失っていたせいでもあったが、交通機関の不整備がまず第一の原因であった。鉄道の状況は、ことにひどかった。汽車が何時くるのかも判らなかった。故郷を遠隔地に持ち、鉄道のみをたよりにする者たちに、それは大きな不安と焦躁をもたらした。何しろ食糧も、一日分しか支給されていないのに、汽車が来なければ、一体どうなるのか。

――建物も天蓋もない、歩廊だけの鹿児島駅で、陽にかんかん照らされながら、私たちは空しく汽車を待っていた。待っている外はないのである。歩いて帰るわけにも行かないのだから。［やぶちゃん注：「歩廊」ホームのこと。］

ひどくむしむしと暑い日であった。歩廊にあふれた群のなかで、ふとした言葉の行き違いで、小競合がおこったり、下士官が兵隊に袋叩きにされたりした。その側に将校がいても、横目でそれを眺めているだけで、別に止めようとするでもなかった。かと思うと、向うの方では、変にはしゃいだ歌声がおこって、自棄っぱちな笑い声が立ったりした。すべてが別々に、揺れ動いていた。そしてみんな同じ境遇にもかかわらず、妙につめたい無関心が、どこかに動いているのが感じられた。陽は相変らずかんかん照りつけ、風は死んで動かない。空気はじっとりと湿気を含んで重かった。歩廊の彼方の線路ぎわに、向日葵の花が七つ八つ、一列にうなだれて咲いている。嘔きたくなるような真黄色の大輪だ。時折思い出したように、私は汗づく眼を見開いて、線路の方を眺めるのだが、その度にそこに汽車の姿はなく、花の色ばかりが目に沁みてくる。もう四五時間にもなる。

「――ええい。いつまで待たせる気だい」

近くで誰かが、うなるように叫んだりする。誰もそれに答えない。いつ汽車が来るか、誰も知る訳はないのだ。駅員や駅長でさえも知らないのだから。

「莫迦にしてやがる。この重い荷物を背負って、五六箇所も歩くんだとよ」

――さっき私たちの要求によって、駅員が歩廊にやってきて、その説明によると、九州本線は確実に五六箇所きれ、徒歩連絡せねばならぬが、日豊線は全然状況が不明だと言う。うまく行けば全部つながっているが、断れていれば、どこで降ろされるか判らない。それはそれとして、だいいち、汽車が何時くるのかも分明しないと言う。ダイヤの混乱、それどころ

の話ではなかった。
「今日中に乗れれば、運が好い方ですよ。二日も三日も待ってる人だってある位だから」
――歩廊の一隅に積み重ねた枕木のかげに、私は衣嚢を、抱いてうずくまっていた。炎日の直射を避けて、七八人の兵士が私のまわりにひしめきしゃがんでいる。私より年長の、応召兵ばかりだ。顔がみんな汗でびっしょり濡れている。一体に顔面筋肉の動きがすくない。しかしそれでも、いらいらした表情や、不安げな色を、皆かくし切れないでいる。早く汽車に乗らないと、部隊から呼び返しに来ないかと、怖れている風にも見える。それをごまかすように、彼等は線路を見渡したり、時々ぼそぼそと私語したりしている。注意するともなく、私はその私語をとびとびに耳にとめている。
「――ひどくむしむしするなあ。おい」
「――ほら、こんなにべとべとや」
「――嵐でも来るんじゃないかいな」
「――とにかく早く汽車がこんかのう」
「そううまく行けば、なあ」
そんな風にきれぎれの会話が、ぼそぼそと始まったり、止んだりしている。しばらくしてその中の一人が、暑そうに身じろぎしながら、ぼんやりしたような口調で言う。その声と、むくんだような顔付が、ひどく印象的だ。
「――俺たちはいつも、運がわるい方だったから、のう。いつも、いつも」
しかしこの度は、彼等（私をふくめて）は運が悪い方ではなかった。と言うのは思いもかけず、間もなく奇蹟のように、汽車がやってきたからだ。
歩廊の一角がざわめき立ったと思うと、前触れもなく汚れた汽車が、するすると歩廊に入ってきたのである。午後の二時。客車を五六輛しかつけない、短く矮小な列車であった。それが僥倖にも、丁度私たちの前に止ったのだ。四方からわっと沸きたって押しよせる中を、私たちはむちゃくちゃに動いて、どうにか客車に乗り込んでいた。歩廊の群を半分以上積み残し、叫声と罵声をあとにして、やがてとにかく汽車は動き出した。積み残された者達の呪いを背にうけて、私たちは曲りなりにも、座席の一角に必死にとりついていた。
今思って見ても、これはとにかく一応の幸運だったと言えるだろう。（真の幸運だったかどうかは判らない）後で聞いたのだが、この汽車に乗りそこねて、それから二日間、ここで日曝しになっていた兵隊もあった、という話だから。

三

都城を過ぎる頃から、列車をおおう空模様が、あやしく乱れ始めてきたのである。
大きな掌をひろげるように、薄墨色の雲群が地平からぐんぐん伸びて、やがて太陽を包みかくしてくるらしい。車窓に飛び去る稲田や疎林が、風が立ちそめたと見えて、思い思いになびき揺れている。その風景の部分部分が、急に蒼然と日の色をうしなってくる。
なにか不安なものが、かすかに胸に滲んでくる。今朝部隊を離れるときの、あのへんに狂騒的な亢奮がもう醒めかかっていて、窓から吹き入る風に私は顔をさらしたまま、しきりに

首筋や背中の汗をこすりとっていた。湿度がしだいに高まるらしく、顔を内側にむけると、眼鏡がすぐに曇ってきた。

隼人駅で、九州本線に乗り換える者が、ぞろぞろとかたまって下車したが、それ以上の人数が入れ替りに押し入ってきて、車内は身動きもできない程であった。人いきれでむんむんする。大部分は年とった補充兵だが、年若い兵隊や下士官などもばらばらといた。

下士官が通路にしゃがんだりしていても、座席の兵隊は今は席をゆずろうとしなかった。そしてそれは不自然ではなかった。ごくあたり前の情景に見えた。部隊では一律に同じような生彩のない顔をしていた連中が、汽車でそこから離れ遠ざかるにつれて、すこしずつ娑婆の表情をとりもどしてくるのが、はっきり感じられた。遠慮がちだがやはり浮わついた調子で、皆会話を交したり、控え目な笑い声をたてたりしている。老兵が席を占め談笑するそばに、若い下士官が疲れてうずくまっている。数日前までは想像もできない風景だが、今ではすでに、軍服はまとっていても、世間のおじさんが席にかけ、生白い若者がしゃがんでいる、そんな風にしか見えない。戦終って数日経ち、軍務をとかれた今となっては、おのずから年齢という世間の掟が、この車室にも通用し始まるらしい。それを不自然でなく眺める私も、いつしか世間の感情を、徐々にとりもどし始めているのだろう。――しかしその自覚は、必ずしも今の私に愉快ではないのだ。ひどい倦怠のさなかにいるような、また密度の違う世界に無理矢理に追いこまれるような、生理的にかすかな厭らしささえ、ありありと感じられる。何故だろう。戦争から解放されて、今はすっかり自由になったというのに、私のこの感じは一体何だろう？

私の前の座席には、鹿児島駅いらいミミズクに似た顔をした四十四五の老応召兵がちょこんと腰かけていた。

押しつけられた窮屈な姿勢のまま、彼はさっきから衣嚢の口を開いて、その中の風呂敷包みを結び直したり、小さな木箱をとり出して、その中のものを詰め換えたり、整頓したりしていた。木箱の中には、解員時に分配された航空糧食や携帯口糧がぎっしり詰っている。ふと見るとその上に、小さな写真が一葉、表をむけて乗っかっている。

その私の視線に気付いたのか、垂れた瞼をひっぱりあげるようにして、その老兵は顔を起した。濁った大きな眼である。首を左右にふりながら、はっきりしない呂律でつぶやいた。

「――子供がふたりもあるのですよ。九つに六つ」

特に私にむかって言った調子でもない。独白じみた呟きである。表情のはっきりしない、いくらか沈欝な感じのする容貌だが、その瞬間にある笑いが、喜悦とも羞恥ともつかぬ色をのせて、ぶわぶわと顔いっぱいに拡がるのを、私ははっきり見た。

ある感じをもって、私はぐっと背を立てた。そして少し乱暴な動さで右手を伸ばし、老兵の木箱の中から、すばやくその写真をかすめ上げた。老兵のカサカサした掌が、あわててそれを追ったが、私はもうその写真を、自分の眼にかざしていた。

「ふん。これがその、あんたの息子さんたち、というわけだね」

［やぶちゃん注：「都城駅」はここ。宮崎県都城市。「隼人駅」はそこから西直線で三十一キロ手前の鹿児島寄りのここ。現在は鹿児島県霧島市隼人町。なお、私はあくまで地理に不案内な方のために注しているだけで、私のために附しているのではない。私の母はこの日この

時、鹿児島県曽於市大隅町岩川にいた。十三歳であった。祖父は旧志布志線岩川駅近くの歯科医であった。]

四

この老兵は、さっき鹿児島駅の歩廊で、私のそばにしゃがんで、仲間とぼそぼそ私語をしていたあの男だ。それを私は知っている。そして汽車がきた時、私の手にたすけられて、やっと窓から転がりこんで、私の前の座席にすわったのだ。

しかしこの印象的な風貌を、私はその時初めて意識にとめたのではない。

この赤く濁った大きな眼を、ミミズクに似た顔を、ずっと前から私はよく見覚えているのである。この老兵は鹿児島ふきんの海軍基地で、私と同じ部隊にいたのだ。

この部隊に転勤になった当初のころ、私は足指にヒョウソを病んで、毎日医務室にかよっていた。診察の順番を待つための行列のなかに、私はこの男の顔をしばしば見た、と思う。

元来設営の袖充兵らしいのだが、身体にどんな故障があったのか知らないが、そんな具合に医務室へ出入しているうちに、設営の任に堪えないと診断されたのかも知れない。その次気がついたときは、彼はいつの間にか医務室の雑用がかりになっていたようである。顔色は悪くぶよぶよとふくれてはいるが、肩や胸が不釣合にほそく、手指が妙に長くて、掌全部はまるで鳥類のそれのようにカサカサに乾いていた。

部隊に赤痢が蔓延していると言うので、その掌に消毒剤を入れた噴霧器を握り、あちこち消毒をして廻っていた。これはおおよそ楽な配置であっただろう。私の居住区にも、両三度来た。

ある夕方、私は当直の疲れで寝台に横になり、うとうとと眠り始めていた。

するといきなり生ぬるい霧のようなものが、裸の胸や脇腹にふきつけてきたので、ぎょっとして眼醒めたら、この男が噴霧器を乙な形にかまえて、寝台の側に立ちはだかっていた。

[やぶちゃん注：底本には最後の句点がないが、誤植と断じ、補った。]

私はとたんに腹を立てた。

「なんだ。寝てるところに、薬をかけるやつがあるか。目は疣か」

私は思わず上半身を起してどなっても、この男の顔つきは、なぜ私がどなるのか理解しかねる、といったようなぼんやりした表情であった。

「兵曹。私は消毒をばしているところです」

大きな眼をみひらいて私を見ているのだが、その眼は丁度、昼間に大きく開いていても視力を喪失しているあのミミズクの眼に、そっくりであった。こっちの姿が彼の瞳孔にうつっているのかどうか、はなはだたよりない。

こんな場合に怒ったって、相手はみじんも反応も示さないにきまっている。それは私はかねて充分承知しているのだから、にがにがしく舌打ちでもしてから、呟く外はない。

「いい加減にしろよ、ほんとに」

いい加減にしなよ。ほんとに。

私は知っている。

私も補充兵だから、年配で海軍に召集された男たちの気持は、だいたい類推できる。

私たち三十歳前後の連中は、前年召集されたのだが、四十代の男たちはおおむねこの年に入ってからだ。だから私は、私の後から次々入ってくる連中の様子を、つぶさに眺めてきた。彼等は大体同じコースをたどって、同じ型の兵隊になってゆくのだ。

入団する当初は、彼等は皆それぞれの世間の貌(かお)をぶらさげてくる。自尊心だとか好奇心だとか、軍隊内では通用しそうもない属性を、表情に漲(みなぎ)らせてやってくる。もちろんある種の構えをもって、――いかにも烈しい肉体的訓練を充分覚悟しているぞ、といった風な気構えを誇示しながら、悲壮な面(おも)もちで入ってくる。

ところが一箇月もたたないうちに、息子ほどの年頃の兵長に、ようしやなく尻を打たれたり、甲板掃除で追い廻されたり、だんだん自分が人間以下に取りあつかわれていることが、身に沁みて判ってくる頃から、彼等の世間なみの自尊心や好奇心や、その他もろもろの属性は、しだいに消えてなくなってゆく。喜怒哀楽が表情に出てこなくなる。

しかし消えてなくなるのは、表面からだけだ。彼等の感情は表に出ずに、もっぱら心の内側に折れこんでゆくのだ。するどく深く、折れ曲ってゆくのである。彼等は総じて無表情となる。

そして彼等は頑強に無表情をたもち、そこでいろんなものを韜晦(とうかい)することによって、その日その日を生きようと思い始める。肉体を、上から命ぜられても、最小限度に使用しようと心にかたくきめる。肉体のみならず、精神をも。[やぶちゃん注:「韜晦」自分の本心や才能・地位などを敢えて包み隠すこと。]

かくして彼等はみな一様に動作がにぶくなり、しだいに痴呆に似た老兵となってゆくのだ。勿論これらは、根本的にはポーズにすぎない。しかしもうその時は、それが擬体か本体か、外部からは見分けがつかなくなっている。そして若い兵長や下士官が、なんて年寄りはのろくさいのかと怒り嘆いても、彼等がふたたび娑婆に戻れば、生馬(いきうま)の眼を抜くような利発な商人であったり、腕っこきの職人であったり、あるいは俊敏な学者であることには、とうてい思い及ばないだろう。[やぶちゃん注:「擬体」表記はママ。後で正しく「擬態」と出る。同じミスは既発表の梅崎春生「生活」にも認められるので、丁寧な再推敲もせずに援用していることが判る。]

流体がおのずと抵抗のすくない流線形をとるように、彼等はいろんな抵抗を避けるために、概していかなる擬態をも採用する。その為につんぼの真似をしたり、馬鹿をよそおったりすることも、珍らしいことではないのだ。

ここに仮に、彼等と書いた。彼等ではない。もちろん私ならびに私たちである。

ただ三十前後の私たちが、長いことかかっても、完全には化け終(おお)せなかったところを、此の年召集された四十前後は、極めて巧妙に、しかも頑固になしとげたようである。世間で苦労してきた賜(たまもの)という外(ほか)はない。

だから私は、軍隊で会ったいかなる人間も、だいたい信用しない。ことに四十代の兵隊を。

私ですら贋(にせ)の表情をどうにか保ちつづけてきたから、この男たちもうまく仮面をかぶり終せたに違いないのだ。

今この座席から見渡せる幾多の老兵らも、部隊にいた時は、ただひとつの表情しか持ちあわせなかった。それがただ部隊をはなれ汽車に乗ったというだけで、もはや娑婆の風情(ふぜい)をとりもどし始めている。

私の前にいる老兵も、部隊にいたころは、なにか得体の知れぬ痴鈍な感じだったのが、今ははっきり解放された喜びを、身のこなしにあらわしている。向うの座席に、所書(ところがき)をかいて交換している二人の老兵も、弁当を分け合って食べている他の群も、それはもはやあの一つの表情からぬけ出している。世間人としての匂いを立て始めている。老兵からかすめた小さな写真に眺め入っているこの私にしても、はたから見ればやはりそう見えるのかも知れないのだ。――しかし召集前、私はそんな世間の貌(かお)を信用していたのか。世間の中で私は、自らを韜晦(とうかい)せずに純粋に生きてきたのか。ふとその事に思い当ると、にがい唾が口にいっぱいあふれるような気持がして、私は写真をぐっと老兵の方につき戻した。

「そうです。そうです」私が写真を眺めている間、彼は私の顔をじっと見守っていたらしい。ぶよぶよと頬にゆるんだ笑いをうかべて、しきりに合点合点をしながら、調子をつけるように、

「これが長男、これ、次男」

ピントの合わぬ、ぼやけた写真であった。縁が色褪(あ)せているのは、おそらく汗がしみたのであろう。納屋(なや)みたいな感じの建物の前に、子供が二人写っていた。二人とも、まぶしそうに笑っていた。大きい方は頭が平たく、手には小旗を持っていた。小さい方はくりくりした眼を、あらぬ方に向けている。その眼の形が何となく、この老兵にそっくりである。子供たちの背後に、三十五六の女が立っている。母親なのだろう。これは笑っていない。うつむいているので、眉の間に暗い翳(かげ)がおちている。女も子供も、上等の服装はしていない。あまり裕福な感じではない。しかしこの素人(しろうと)らしい撮り方のゆえに、子供の頬の乳くさい軟かさや、日向(ひなた)に照らされた着物の匂いのようなものまで、かえってなまなましく画面に浮びただよっている。

「うしろのは、おかみさん？」

「ええ。ええ」

老兵はそれを大事そうに、ちらと私にかざして見せた。車窓からどっと吹き入る風が、その縁をひらひらとなびかせる。風が急にひやりとした湿気をふくんでくる。部隊にいた頃は、過去もなにもない、現象みたいにしか眺められなかったこの男が、ふるさとには家庭と職業をちゃんと持っているということが、俄(にわ)かに実感として私に迫ってきた。その実感は私自身にからんで、なにかかすかに不快な抵抗を伴ってくる。

「故郷(くに)はどこなんだね。どこまで帰るのか」

「へへえ」写真を丁寧に箱にしまいながら「原籍は福岡県です。しかし、その、居住区は別府」

居住区だってやがら、と通路に立った若い上等兵がわらい出した。乾いてぎすぎすしたわらい声であった。老兵はきょとんとした顔をあげたが、そちらを見るでもなく、こんどは別

の小さな紙包みを箱から取り出して、無神経に私の顔の前にひらひらさせた。
「あなたさん」私のことをそう呼んだ。「これを湯で溶かすと、そっくりお萩になりますがな。餡粉は餡粉、御飯は御飯、とな。さっき駅で仲間のものが、うまいとこ拵えて食べよりました」
航空糧食の一種で、お萩を粉末にしたものである。私も三四箇支給をうけて、衣嚢の中にしまってある。
「あんたはなぜ食べなかったんだね」
「へへえ」老兵はまた曖昧な笑い方をしながら「子供に食べさしてやりたい、と思いまして、な」
「子供に会いたいかね」
老兵は何か言いかけて、口ごもった。灼けつくような色が、その赤らんだ眼の底をはしって消えるのを、私は見た。老兵の略帽は、長いこと洗濯しないと見えて、うすぐろく変色している。

六

野面に光が蒼然とおとろえ、数百の復員兵をのせたこの小さな列車は、いやな軋りを立てながら、がらんとした大きな駅に辷りこんでとまった。
停車と同時にあちこちの窓から、ぴょんぴょん蝗のように飛び出して、歩廊の水道栓に兵隊らは走ってゆく。群りひしめく彼等の青いシャツの裾が、一斉にはたはたとなびく。吹きつける風はさらに、歩廊の表面をぬめぬめと光らせ、線路の側で小さな渦巻きをつくっている。
眼をあげると、油煙を溶かしたような黒雲が、もはや南の空の半分をおおい、その千切れた雲端をはげしく揺すりながら、ひくく垂れ下ってくるらしい。それを眺めていると、胸が急に息苦しくなってくるような、背後から追い立てられるような、不安に満ちた緊張感が私に迫ってくる。
「これは嵐になるかな。悪くすれば」
なにかをごまかすように、口の中でつぶやいてみる。
汽車が突然ごとんと動き出すと、水を汲み残したままの水筒をかかえ、七八人の兵達が叫びながら歩廊をはしって、ばらばらと汽車を追ってくる。大きな踏切りを越えた。線路沿いのせまい道を、カンカン帽をかぶった中年の男があるいて行く。突風がいきなり帽子を吹き飛ばした。白い浴衣のたもとを風でふくらませながら、男は腰をかがめてそれを追っかける。黒い柵伝いに、カンカン帽はどこまでも転がってゆくのだ。その男の姿体を、はっきり私の眼底に残したまま、汽車はそこを轟然とはしり抜けた。
「ああ、あの感じなんだな」
浴衣にカンカン帽をかぶった姿。そんな服装が暗示する生活。それがこの世間にあるということ、自分にふたたび始まるということが、なぜか先ず肌合わぬ感じとして私にきた。そ

んな生活を私もかつて営(いとな)んでいた。その記憶がとつぜん身体によみがえってくる。いつか私もあんな姿勢で、飛ばされた帽子を追っかけた。その時の気持や身体の感覚。――この汽車で東京にもどる。着物を着て、畳の上で飯をくう。背広をきて、毎日役所にかよう。夕方夕刊を買って、省線で戻ってくる。時には風で帽子を吹き飛ばされたり、乏しい銭で安酒を飲んでみたり、そんな生活の枝葉。(しかしそんな生活をこそ、この二年近くの間、私はひそかに渇望しつづけていた!)

それだのに今となって、その渇望は渇望の形のまま、へんに不透明な翳(かげ)をひき始めている。ごく微かな、ぼんやりした侘しい翳を。それはいきなり気圧の低い世界に立たされたような、生理的に不安定な感じを伴っている。湿って不味(まず)いほまれを、ざらざらと口に吸い付けながら、私はしきりに煙をはき出していた。今朝部隊の門を出るときの、あの昂揚(こうよう)された自由感が、何時の間にか、なにか質の違ったものとすり替えられている。そんな筈はあり得ないのに、その感じは膜のように私にかぶさってくる。そいつの襞(ひだ)を探りあてようと焦(あせ)りながら、私は視線だけをぼんやり窓外にあずけていた。その私の頬や額を、とつぜん水粒をふくんだ風が、つめたく弾(はじ)き撲(なぐ)った。[やぶちゃん注:「ほまれ」軍隊内で需品として支給されていた軍用煙草の銘柄の一つ。「保万礼」「譽」「ほまれ」の表記のものもある。大蔵省専売局が製造・発売した紙巻煙草の銘柄で発売当初は民間用だったが、後に軍隊専用となった。旭日旗を交差させたデザインである。]

「雨だ」

車内があわただしくざわめいて、ガタガタと窓のガラスを立て始めた。いきなり人いきれがこもって、ぼうと眼鏡が内側から曇る。

長い時間不自然な姿勢で、座席にいるせいで、尻の骨がぐきぐきと痛い。前の老兵が衣嚢の紐(ひも)をぐいぐいしめる度に、そのかたい角が私のすねをつき上げてくる。外は蒼然と昏(く)れかかるのに、車室には燈が全然ともらない。

車内の皆は、やや談笑に疲れたのか、ぼんやりしている者が多いが、それらの眼が明かに不安を宿して、時折窓外にはしるのも、あやしい空模様につながって、列車が何時停まるか知れないという危惧(きぐ)を、はっきり感じているに違いないのだ。その危惧は、私をも強く摑んでいる。(戦争がすんで、やっと身軽になったというのに、また見知らぬ土地におろされて、厄介なことになるのは、もう御免だ)しかし誰もまだ、それを口に出さない。うっかり口辺らせると、たちまちそれが実現するかも知れない。そんな畏(おそ)れが、皆の口をつぐませている風に見える。そこだけを避けて、低声の会話が交されている。

「さっきのあの駅、宮崎?」

「え。広瀬。広瀬だろう」

「大分(おおいた)着は、明朝かな。この分では午過(ひる)ぎになるかなあ。え」[やぶちゃん注:独立した「え」は相手への応答を促す辞。]

衣嚢の紐を結び終えた前の老兵は、すこしの間窓の外を見ていたが、ふと心配そうに私に問いかけてきた。

「この汽車はまっすぐ、別府まで行くとでしょうか」

[やぶちゃん注:「宮崎」駅はここ、「広瀬」駅は現在の宮崎県宮崎市にある佐土原駅の旧称。

後の昭和四〇（一九六五）年七月に佐土原駅に改称している。」

七

「おれは知らんよ」あとは思わず口に出た。「おそらくどこかで、断(き)れているだろう」
「断れているとすれば、私どもはどうなるとでしょう」
「降りるんだよ」
そっけなく私は答える。日豊線をえらんだことについて、しだいに私は後悔し始めていたのである。隼人(はやと)で下車して、九州本線に乗り換えればよかった。さんざん選んで、これでは悪い籤(くじ)を引きあてたかも知れない。いやな予感がする。隼人駅で手を振りながら降りて行った連中の姿が、ある感じをもって瞼にうかんでくる。
しきりに顔の汗をぬぐいながら、ガラス窓に吹きつける風雨の音を聞いているうちに、私はしかし急に胸がいらだってきた。
「どうせ、どのみち、家へ帰れるんだ。二日や三日伸びたって、大したことはないさ」
「え。へえ」
「そんな早く帰り着いても、しかたがないじゃないか」
老兵は頬にちょっと厭な色をうかべて黙った。そしてまっすぐ私を見て言った。
「私どもは、一刻も早く、帰りたいとです」
はっきりした口調であった。私はすこしひるんだ。部隊にいたときのように、命令を受けても理解できない風であったり、寝ている人間に消毒液をかけたり、そんなけたを外(はず)した動作や感情は、もうこの男にはない。あれはやはり擬態だったのだ、と思う。意識した擬態ではないとしても、保護色や警戒色のように外界に反応して、自然とその個体に具わったのだろう。しかしそれはどちらでもいい。もはや私と関係ないことだし、それほどの興味もない。ないにも拘(かかわ)らず、この老兵の顔を見ていると、私はしてやられたという感じが強かった。
私から眼をそらさず、老兵はまた追っかけるように、口をひらいた。
「あなたさんはそれほど、帰りたくないとですか」
「いや」私はたじろいだ。すぐ気を立てなおして、こんどは逆に相手をたしかめるように「そんなに帰りたいものかな。家では何をやっていたんだね」
「人形を造るとです。人形師」
別府土産の人形をつくるのが、その商売だという。それから老兵は、やや雄弁になって、粘土から人形を造り上げる工程を、いちいち話し出した。時々手真似も入る。小さな工房をもち、そこで注文の仕事をするのらしい。職人は使っていないが、弟が一人いて、それと一緒に働いていたのだという。
「――私が学資を出してやりましてな、中学を卒業させました。ところが中学出ても、人形をば造りたいと言うもんで、仕事の加勢をさせておりますが、これが私ども以上の腕利きで、これが人形は、別府でいっとう良い店から、いくらでん注文があるとです。え、二月。二月に私が海軍に引っぱられたあとは、弟一人でやっておりましたが、これも六月頃陸軍に引っぱられたということで、女房からその便りがあったきり、その後のことは判りませんです」

「お内儀さんはあの写真のうしろに立っていた人だね」
外ではますます、風雨がつのってくるらしい。列車は左右に厭な振動をつづけながら走ってゆく。窓ガラスに雨滴がぶつかって、筋となって流れおちる上を、また新しい雨滴がつぎつぎ打ちつけてくる。車室の内部も暗く、人々の顔の輪郭も定かならぬほどだ。反対側の窓の彼方に、海が墨色に拡がっているように見えるが、それも海かどうか判らない。視野はいちめんに昏く、一色に轟々と鳴りはためいている。
通路で誰かがマッチをすった。瞬間そこらあたりが、ぽうと薄赤くほのめく。その光に浮き上った人々は皆、顔にかぐろく隈をつくり、まことに荒み果てた感じであった。
身体のしんに熱っぽい疲労を感じあてながら、私は背を曲げて、時折物憂くあいづちを打ちながら、老兵がしゃべるのをうつうつと聞いていた。他に何かやらねばならぬことが、沢山あるような気ばかりしながら。

八

「……巡検が終りますとな、いつも砂浜の莨盆にでて、仲間のものと夜遅くまで話しこむとです。皆帰りたいという話ばかりで、何の因果でこんな海軍に入ったんじゃろか、孫子の代まで海軍には入れんちゅうてな。私は医務室の仕事になったから、まあ良かったけんど、他の連中は、この汽車にも乗っとりますが、毎日モッコかつぎで、肩の肉がやぶれたり底豆を出したり、とにかく満足な体の奴はおらんとです。みんな私が楽な仕事をしているのを羨しがりましてな、いつも言い返してやったとですが、お前らは要領がわるい、軍人は要領を旨とすべしと知らんかてな。しかしあまり可哀そうなんで、医務室から薬をもってきてやって、煙草と交換してやったりしましたたい。その薬を罠盆のまわりでつけ合いながら、こんなとこ見たらカアチャンが泣くだろう、そんなことか二人が言ったりしますとな、笑うどころか皆しんとしてしまって、そんな具合にしてやっと、八月十五日になりました」［やぶちゃん注：「そこまめ」。足の裏にできる肉刺。］
「――ラジオがあがあ言うだけで、なんにも判らず、隊長さんの訓辞では、今よりももっと働かねばならんという話で、居住区へ戻ってきて、陛下もこれ以上やって皆死んでしまえとは、何とむごいことをおっしゃるかと、みな寄り合って悲観しているうちに、あのラジオは終戦のことと判りましてな、班長や分隊士がやけになって酒をば打ちくろうて、まことに今まで一生懸命にやってこられたのに、何ともはや気の毒とは思いましたけんど、私どもは皆してこれで家へ帰れる、子供や女房の顔も拝めるちゅうて、悪いと思ったが、肩をたたき合うて喜びましたがな。この世ではもう逢えぬ、こんりんざい逢えぬと、私どもはあきらめて、なるたけ思い出すまいとつとめておったところへ、とっけもなくこんな事になって、私はそれから女房や子供のことばっかり考えつづけですたし」［やぶちゃん注：「とっけもなく」「思いもよらず、とんでもないことに」の意。熊本弁として認識している向きが多いが、江戸後期の「東海道中膝栗毛」に既に口語形容詞として使用されており、宮城生まれ東京育ちの志賀直哉の名作「暗夜行路」でも使用されている。］
「――へええ。女房は今年三十二になります。おとなしい、良い奴でしてな。出てくる時、

おれが死んだら弟と一緒になれ、そう言うたらな、情(じょう)がないちゅうてむちゃくちゃに泣きましてな、私もそんな覚悟でいた処をこんなことになって、あいつもさぞかし喜ぶじゃろ。あいつにもなにか軍隊土産(みやげ)でも持って行きたい、と思いましても、隊で支給されたのは兵隊のものばっかりでな、甘いものも少しは貰ったけんど、これは子供の分。その他は、毛布や、米や、罐詰(かんづめ)や。女むきの土産物は、何もありやせんちゅうて、笑い合ったりしましたけんどな」

「――何も要らん、帰してさえ呉れれば、何も要らん。こつちから金出してもいい、と言うてた連中が、いよいよ帰れるとなると、皆とたんに慾張りになりましてな、俺の毛布はスフだから純毛のがほしいとか、靴をかっぱらわれたから又盗(と)ってくるとか、浅間しいと思いますけんど、私もそれでな。これだけあれば、四五年は着る物の不自由はせん、そうなれば女房もたすかるだろうし、また伜(せがれ)たちにしても……おや？」［やぶちゃん注：「スフ」レーヨン（rayon）の旧称。人絹（絹のように光沢を持つことから）とも言った。「ステープル・ファイバー（staple fiber）」（本来は「不連続な長さの繊維状のもの」の意）の略。太平洋戦争中、輸入削減によって綿花が極端に不足したため、それを補うために国内の化学繊維で作った紡績用の短繊維を指す。］

がたんと汽車がとまった。どこかの駅についたらしい。と思ったとたん、濡れた窓ガラスの向う側に、人の顔が五つ六つひしめき迫って、手でガラスをがたがたとたたく。同時に叫び喚(わめ)いているらしいのだが、何を言っているのか、さっぱり聞きとれない。ガラスがべっとりと水に濡れているので、それらの顔の形は暗く歪(ゆが)んで、幽鬼じみてこちらに迫ってくる。

「あけるな。あけるな」

「喚いたって乗れやせんぞ。こんなにいっぱいだあ」

車内の通路から、そんな声がとぶ。

しかしその勢に押されて、ついに開いた一つの窓から、外の声々が決定的な意思を伝えて、かん高く突き通ってくる。

「この汽車は、ここ停りだぞ」

「先には行けんぞ」

「早く降りろ、降りろ」

口々に喚きながら、窓からいきなり荷物を押しこんだり、気も早く上半身を車内につっこんでくるのもいる。みな年若い兵隊や下士官らだ。

「先にはもう行けんぞお。鉄橋が落ちたんだあ。ぼさぼさするなあ」

この駅のすぐ先の鉄橋が、増水のため落ちて、不通になっているというのだ。この連中は延岡(のべおか)付近の特攻基地の解員兵で、徒歩連絡で河を越え、鹿児島方面へ帰郷する途次だという。全員びっしょりと雨に濡れている。動作はあらあらしく、殺気立っている。［やぶちゃん注：「延岡」ここ。］

出る者と入ろうとする者で、たちまち狭い車室は大混乱になった。暗い車内に、黒い影がいそがしく入り乱れ、濡れた肌の臭いがひしひしと充満した。名前を呼び合う声や、ののしり合う声に混って、窓ガラスがパリパリパリと砕け散る音がひびきわたった。

重い衣嚢に引きずられるようにして、私は真暗な中を、なかば窓から転がり落ちた。飛沫

をふくんだ烈風が、その時私の全身に、横ざまに吹きつけてきた。私は立ち上ろうとしてよろめいた。

［やぶちゃん注：「先にはもう行けんぞお。鉄橋が落ちたんだあ」次章冒頭に出る高鍋駅のすぐ北で小丸（おまる）川河口に架かる小丸川橋梁がある。この橋は小丸川の河口部直近内側が南北に延びる砂州の内側で大きく抉れて広くなっている部分に架橋されているため、非常に長いことが判る（リンクさせたグーグル・マップ・データ航空写真を拡大されたい）。ウィキの「高鍋駅」には、**昭和二〇（一九四五）年七月十六日**に『空襲により』、『駅本屋構内被災全焼し』、『小丸川橋梁落橋』とあるものの、七月二十七日に『橋梁復旧』とするのだが、「国土交通省　九州地方整備局」公式サイト内のこちらの「小丸川鉄道橋（おまるがわてつどう）」を見ると、『日豊線整備の一環として大正』八（一九一九）年に『小丸川鉄橋が着工、同』一〇（一九二一）年の春、『長さが九州第一の』八百五・四九メートルに及ぶ『大鉄橋、小丸川鉄橋が完成した。これによって高鍋、美々津間の日豊線が開通した』。しかし、**昭和二〇（一九四五）年六月二十九日**の『大空襲で小丸川鉄橋は大型爆弾の集中投下を受けて』五『ヵ所のガードが落ち』、『不通となり、日豊線は折り返し運転となった。さらに』、**昭和二〇（一九四五）年八月二十七日の台風によって被害を受けた**、とあり、昭和二三（一九四八）年三月二十日になってやっと再建された、とある。**この最後の記載はまさにここで描写される台風のことを意味しているように思われる。**日付が前の香川県のデータの後になってはいるが、この時、台風が襲来した事実の傍証ともなろうかとも思われるので示しておく。］

九

日豊線高鍋駅。

その建物を、その時、私は初めて見たのである。（そしてもう永久に、見ることはない）

ペンキの塗立てみたいな、つい近頃建てたという感じの、しょうしゃな駅舎であった。しかしそこら一帯が停電で、燈ひとつない暗さだから、はっきりと見て確かめた訳ではない。ただそういう感じがしただけである。

私たちは降りしぶく歩廊をはしり、改札をぬけて、この駅舎の中に集っていた。総数にして、千名近くの復員兵が、汽車を見捨てて、暗い待合室に続々と詰めかけてきた。

駅のすぐ前から、高鍋の町が始まっているらしい。薄黝（うすぐろ）い屋根の稜角が、ぼんやりした空明りを背にして、凸凹にそそり立っている。雨をともなった烈風が、そこら一帯を間歇（かんけつ）的に、どどっ、どどっ、と吹き荒れている。汽車を乗捨ててきた歩廊の方角は、激しいしぶきにさえぎられて、一面の真暗闇である。［やぶちゃん注：「黝」は音「ユウ」で、「蒼黒い・黒・黒い・黒む・薄暗い」などの意を持つ。］

しかも風威はしだいに加わってくるらしい。

風と風との間の小休止が、だんだん短くなってくる。

切迫した空気が、急に闇のなかに立てこめてきた。汽車の中では、自分も動いているのだから、それほどには感じなかったが、こうして静止して見ると、ただごとでない状況におかれたことが、ひしひしと身に迫ってくる。と言ってこちらからは、何も手を下しようがない。

無抵抗に身をすくめて、それが収まるのを待つ外はないのだ。
暗い待合室には人と荷物がぎっしり詰め合って、輪郭も定かに見えないが、気配だけは物々しく動いていた。あらあらしい呼吸、物を引きずる音、それらが触れ合いぶっつかる音、呼びあう声々、それらを圧倒するように、地鳴りと雷鳴を伴った烈風が、建物全体をぐゎんと撲りつけてくる。建物は生きもののように悲鳴を上げながら、ぐらぐらと身震いをする。その瞬間だけは、駅舎内の物音と人声はすべて絶え、呼吸をつめた沈黙がそこに凝縮する。建物の振動や軋(きし)り音の感じから、この駅舎がひよわな細っこい建て方をしてあることが、皮膚にじかに伝わってくるのである。
「こいつはまずいな。こいつはまずいな」
闇の底に衣嚢を置き、それにのしかかるように身をもたせながら、私はしきりにつぶやいていた。雨に濡れて肌は冷えているのに、額からはじとじとと汗が滲み出てくる。今は暗くて判らないけれども、明るいところで見るこの駅の有様を、私は頭のすみで想像に組み立てていた。近頃出来に特有な、資材不足で手を抜いて、ペンキやベニヤ板などで外観だけをととのえた、やわな建物の外貌を――その建物の在り方をのろう言葉が、思わず口に上ってくる。何かしら呟いていないと、すこし不安なのだ。［やぶちゃん注：「近頃出来」「ちかごろしゅったい」と読んでおく。］
「あぶないぞう。あぶないぞう」
闇の遠くから、そんな声がちぎれちぎれに間えてくる。
風の合い間には、やはりそこらで色んなものが動き廻り、短い会話のやりとりが交されている。この風雨を冒(おか)して、川向うの駅まで徒歩連絡に出かけた一団が、やがて空しく戻ってきたらしい。大丸川は大氾濫(はんらん)していて、橋をすべて没し、渡河は不可能だという。不安からくる緊張が、それらの会話を生き生きさせている。どこかで笑い声さえひびいている。すべてが狂躁的に、呼吸(いき)ぎれしたようにはずんでいる。［やぶちゃん注：「大丸川」**小丸川(おまる)の誤り**。既に注で述べた通り、高鍋駅から北へ出てすぐの位置に大きな河口があり、そこに九州一の橋梁が掛かっている。］
烈風がおどろな響きをつれてひとしきり襲ってきた。建物は熱病やみのようにはげしく慄え立ち、不快な軋り音を発して揺れた。ガラスが破れる音、なにかがもぎとられるような音がして、つめたい飛沫がさあっと顔にかぶさってくる。建物の一部が、窓か壁か天蓋かが破れて、そこから雨が直接降りしぶいてくるのだ。
私は無意識裡(り)に、衣嚢を身体でおおう姿勢になっていた。衣嚢が濡れるのが心配なのか。その倒錯に気付くと、私は急に腹だたしくまた可笑(おか)しくなって、勢よく背をおこして立ち上った。風威はいささかも衰えるもようはないが、雨はいくぶん小止みになった様子で、それで空がすこし明るんだのか、あるいは眼が闇に慣れてきたのか、ものの動きのぼうとした輪郭が、視野にちらちらととらえられて来た。
駅舎内から三々五々飛び出して、風雨に安全な場所をもとめて、人影が街なかに駈け出してゆくらしい。そこらで呼びあう声が、風の音にまぎれて聞えてくる。白い稲光(いなびかり)がぱっと流れて、軒下を駈けてゆく人々の姿を、瞬時に照らし出した。
その時建物の土台から、ぎぎっと突然不気味な音がひろがって、風圧に耐えかねて駅舎全

体が、すこし傾きかしいだらしい。突風がうなりを立てて、どどっと吹き入ってきた。
顔の皮が急につめたくなるような気がして、私も衣嚢を引掴むと、いろんなものとぶつかり合いながら、出入口の仄明(ほの)りへ飛び出した。そして呼吸をはずませて街なかに走り入った。

一〇

その高鍋の町の有様は、その夜の私のきれぎれの印象を、今ここにつづり合せて見ても、ことのほか異様である。
しかし私は少からず動顛(どうてん)していたから、その時それを異様に感じる余裕はなかった。またその動顛ゆえに、私の印象もはなはだしく錯誤しているかも知れない。記憶や印象の脱落も、もちろんある。
その夜の私の印象では、高鍋という町は、ぜんぜんの無人の巷(ちまた)である。住民ひとり居ない感じの、死に絶えた町の様相であった。
大きな家や小さな家が、参差(しんし)して並んではいるが、すべて爆撃か爆風で根太(ねだ)がゆるんで、傾いたり歪んだりして建っている。全町あげて疎開し、この嵐の下に、がらんどうの家々だけが残っている。あわただしく駈けぬけた印象では、まさしくそうであった。［やぶちゃん注：「参差」互いに入り交じるさま。高低・長短などがあって不揃いなさま。］
私は呼吸をはずませて走っていた。走っているつもりだが、衣嚢が重いのと、風圧がはげしいため、よろめき歩くに過ぎないようである。全身にしぶいてくるのは、雨なのか、水溜りを逆風が吹き上げてくるのか、よく判らない。
吹き倒されそうになると、物かげに身をよせたり、電柱に抱きついたりして、風の弱まりを待って、進んでゆく。何分か、何十分か、そんなふうにして動いていたか、私はよく覚えていない。風雨から完全に避けられる場所を求めて、少しずつ移動しているうちに、どの屋根の下もたよりなく見えて、いっそ歩いている方が安全だ、という気特にもなっていたのだろう。全身は水から引き上げられた犬みたいに、もうこれ以上濡れようがない状態になっていた。
一緒に街に駈けこんだ連中とも、いつかばらばらに別れて、風のみが吹き荒れる暗い夜道を、私はほとんど無我夢中でうごいていた。しぶきが眼鼻をふさいでくるので、時時舌を垂らして私はあえいだ。風物の輪郭は小暗くみだれ、歪みぼやけている。さっき駅舎を飛び出したとたん、突風が私の眼鏡をさらって行ったのだ。
視界がちらちらとする。瞳孔が対象に定まらない。そのことが私の判断力を、なおのこと狂わせてくる。私は眼を大きく見開こうと努力しながら、その瞼の引っぱり上げる感覚で、ふいに先刻の老兵の顔を、あわただしく思い出したりしている。
「あいつは、どうしただろうな。あいつは」
――私はとある家の軒下のような処に身をよせていた。おぼろに眼に入ってくる風物の感じからでは、街外(はず)れのような一角であるらしい。神経はとがっていても、体が綿のように疲れていて、これ以上風に抗して足を踏み出すことは、とても出来そうになかった。ここで夜明ししようか。肩で小刻みに呼吸しながら、私はそうかんがえた。そのうちに風も収まる

だろう。
　それからどの位経ったか判らない。そこらの記憶がない。暗い軒下にある防火水槽のかげにじり寄って、私はひとりうずくまっていた。濡れた肌から身体の内部に、冷えがしんしんと沁み通ってきて、私はがたがたと慄えながら、衣嚢の紐をといていた。毛布などを取出して、万一の場合の防禦物にしようと思ったのである。衣嚢につっこんだ手が、ふと濡れた箱包みに触れたとき、私は今朝から何も食べていないのを思い出した。虚脱した空腹感が、いきなり胃をしめつけてきた。私は昏迷を感じながら、あわただしくその箱を引きずり出そうとした。
　その時、さかまく突風がななめに私におちてきて、いきなり濡れた服の裾を、猛烈にあおり立てた。うずくまる私の腰を浮かすほど、その風圧ははげしく強かった。それと同時に、板片みたいな堅く小さなものが、瞬間に顔の皮をかすめて、私の腕にしたたかぶつかってきた。圧痛が二の腕をはしった。
　私は悲鳴を上げたのだろうと思う。防火水槽の混凝土に思わず懸命にしがみつきながら、眼鏡をとばした不確かな視力で、風の行方を見定めようとしていた。雲が切れて、そこからおちてくる夜の光で、仄白く浮き上った夜の道を、板片や木の枝や、屋根瓦のようなものまでが猛烈な速力で走ってゆくのだ。しかも風位が定まらぬと見えて、それらは突然方向を変えたり、鼠花火のようにそこらを狂い廻ったりしている。
　しんじつの恐怖が、その時始めて私に湧き上った。この颱風は峠をこしていない。まだまだ烈しくなる。その予感が私をぎゅっと摑んだ。それは直覚的に私にきた。
　私は衣嚢もろとも、軒下から土間にころがりこんだ。むしろの下に逃げこむムカデみたいに、嵐の眼から自分を隠すことで、ひたすら生命を保とうとするかのように。安全地を選択する余裕は、もう無かった。――身体がひとりでに、本能で動いた。

一一

　私の直覚は正しかった。
　大体その頃からの数十分が、高鍋の町における、この無名の颱風の最盛期にあたっていたようである。
　不気味な、真空状態に似た静寂が、二分間ほどつづいた。と思うと、地鳴りのような音を立てて、ふたたび烈風が飛びかかってきたのだ。猛烈に飛びかかってきた。文字通りその感じであった。それはひと休みして、最後の打撃を加えてくる猛獣に似ていた。
　私がころがりこんだのは、土間がだだっぴろい、農家造りみたいな家屋であった。分厚い閤を手探りながら、やっと私は上り框にとりついた。框には土や砂がかぶさっているらしく、脛にザラザラと触れた。人が住んでいる気配はさらにない。だから挨拶も略して、そこにある柱にすがって、土足のまま畳へ這いのぼった。手ざわりの感じでは、その柱は丸く太く、直径も一尺ぐらいはあるようである。暗くて家の内部は見えないが、柱のたくましい感触は、いくぶんの安心感を私に与えた。その柱に身をすりよせて、私は大きく呼吸をした。
「――困ったな。困ったことになったな」

皆とはぐれてしまったことが悔(くや)まれてならなかった。皆といっしょならば、気も紛(まぎ)れるだろうし、危機を避けるすべもあるだろう。こう独りとなっては、すべて自分の判断と直覚でうごく外(ほか)はない。しかし私は自分のそれに、ほとんど自信をなくしていたのである。体が冷えてぞくぞくと寒かった。気温も急に低下してくるようだ。その悪寒(おかん)と疲労の底で、足を縮めて丸まった昆虫の姿勢を自分に感じながらも、吹きつける風の方向や強度に私は全神経をあつめていた。

風の間隔がしだいに近まってくるらしい。それと一緒に風速も加わってくることが、家の揺れ方ではっきり感じられる。古い造りだと見えて、家の各部分が風圧に応じて、猛烈なきしりを立てる。四五秒置きの突風は、今までの音とちがって、へんに乾いた狂噪的な響きを帯びている。家の内部は暗い。音だけが私を取り巻いている。滑車に似た梁(はり)の軋(きし)りが、一風ごとに増大してきて、私が倚(よ)る太柱もぐぐっと揺れて、私の身体を衝き上げてくる。おそろしい手答えをその度に私に伝えてくるのだ。

――ここは危険だ？

そんな考えがちらっと頭をかすめる。と、居ても立ってもいられない気持にかられ、闇のなかに片手を伸ばし、私は柱の下をはなれて、徐々に奥の方に移動し始めた。じっとしていることに耐えられなかった。

伸ばした手が、なにか横木にふれた。なお手探ると、それは階段の登り口のようである。この家には、二階がある。

――階下はあぶない！

そのことが矢のように、私の頭にひらめいた。昭和六年の颱風のとき、風で倒壊したある二階家の有様が、その瞬間、まざまざとよみがえっていたのだ。その家は二階は原形のまま、階下だけがぐしゃりと潰(つぶ)れていたのである。私は反射的に足をかけ、濡れた衣嚢を引きずりながら、盲虫のように階段を這いのぼり始めた。

こういう危急の状況に、なぜ重い衣嚢を遺棄して、身軽にならないのか。私はほぼ無意識に、衣嚢を引きずっていたのだろうが、その時側から、それを捨てろと忠告されたとしても、おそらくは捨て切れなかったに違いない。身軽になるということは、ただひとりの自分になることだ。それは言うまでもなく、余りに辛すぎる。その気持が、この重量ある伴侶(はんりょ)に、多分の頼もしさを、私に感じさせていたのだろう。ことに、どこに通じるのかも判らない階段を、盲めっぽうに登っている今の状況としては！

まったく、此の家の構造や間取りを、私は何も知らないのだ。そしてこの家が、高鍋の町のどの地点にあるかということも。――だいいち高鍋の町からして、地図の上で、九州のどの辺に位置するかも、私には見当がつかないのである。「たかなべ」などという駅名を、今日下車してみて、始めて見知った程だから。その私にとって無名にひとしいこの町の、無名の地点の、無名の家の階段を、しゃにむに登ってゆく。その階段の恰好も、それを登る自分の姿勢さえも、まっくらだから、私には全然見えないのである。ただ判るのは、その階段がひどく揺れているということだけだ。

（何ということだろう！）

今朝炎天の下で部隊を離れる時には、予測もできなかった運命が、私におちようとしてい

る。一寸先は闇。文字通り今の状況は、一寸先は闇であった。その闇を手探る私の指が、階段の最上段に触れたらしい。そして私はぎくりとして、ほとんど衣嚢を取り落そうとした。

「誰だ。そこにくるのは」

闇の中から、そんなしゃがれた声が、いきなり飛んできたからである。空家だと思っていたのに、誰かがこの二階にいる。それが私をおどろかせた。私は身構えた。その押しつぶされたような声は、隔意と警戒だけでなく、はっきりと敵意を含んでいたからである。［やぶちゃん注：「隔意」（かくい／きゃくい）は「心に隔たりのある思い・打ち解けない感じ」の意。］

「怪しい者じゃない」

私の返事もすこしかすれた。舌がもつれて、長いこと声帯を使用しなかったような気がした。

「しばらく、雨宿り、させて呉れ。たのむ」

その時、白い稲妻の光が、そこらを瞬間的に、仄明るくした。中二階みたいな、狭い板じきの部屋である。その部屋の真中を、太い柱が立ち貫いていて、その柱のかげにうずくまっている一人の男の形を、私はちらと眼に収めた。上半身が裸だったようである。その裸の胸や手が、私にむかって構えていた。距離は一間［やぶちゃん注：一メートル八十二センチほど。］ほどであった。むこうも私の姿を認めたようだ。

「雨宿りだあ？」

ふたたび闇に沈んだ部屋の中から、男のたかぶった声が戻ってきた。私はそれに短く応じながら、衣嚢を引っぱり上げ、柱の方ににじり寄って行った。階下よりもやはりここの方が、安全なような気がしたし、身近に人間が一人でもいるということが、私には力強く思われたから。

「やけに吹きまくるじゃないか」

私は柱のそばにいた。柱は先刻のより、一廻り大きかった。この家の大黒柱みたいなものようであった。

［やぶちゃん注：「昭和六年の颱風」この当時、梅崎春生は福岡修猷館中学を卒業した十七歳の時で（一浪して翌年に五高に入学）、福岡にいた。この年の台風については、前に見たサイト「四国災害アーカイブス」の中に「昭和６年10月の台風」があり、一九三一年十月十三日に『台風が九州、四国をかすめ、和歌山南方に上陸した。非常に速かったので、短時間**強雨**の被害になった』（下線太字は私が附した。後も同じ）旨の記事があるとある。当該ページには原資料へのリンクがあるので、それで見ると、「中村市史　続編」の「災害編」の中の「明治二十七年より昭和二年に至る風水害」の年表に（実際の年表には昭和九年までのデータが載る）、昭和六（一九三一）年の条に『十月十三日　台風』とあって、『九州四国を掠め、和歌山南方で上陸した七三五㎜の台風。非常に速かったので短時間**強風**の被害となる』とあって、**後者の原資料を信ずるなら、ここでの描写と親和性があると言える。**

「盲虫」「ざとうむし」と当て訓して読んでいるものと思う。節足動物門鋏角亜門蛛形（クモガタ）綱ザトウムシ目 Opiliones に属するグループの総称和名で、異名総称としては「メクラグモ」とも呼ばれるが、その呼称は地方によっては、全く別種の真正のクモ類である足の長い鋏角亜門クモ綱クモ目ユウレイグモ科 Pholcidae の類をも指すので注意が必要。節

足動本邦産は約百種ほどおり、通常は体は七〜八ミリメートルの豆粒状を呈し、五〜六センチメートル、時には十数センチメートルにも及ぶの糸のような長い四対の脚を、盲人が杖で探り歩くように、全身を震わせながら歩行することからの和名である（差別和名として検討が必要だろう。「座頭」自体がその内、若者には漢字も当てられなくなるであろうし）。腹部に明らかな体節構造を持つ点、しかも頭胸部と腹部が密着して見た目が概ね楕円体に纏まって見える点（クモ類は両部の間に明確なくびれが認められる）、出糸突起を有さない（糸を生成しない）ことでクモ類と区別される。夜行性。山地に多いが、平地や海岸にも棲み、岩の割れ目や壁面の角などに多数で固まっていることがある。クモ類には生理的嫌悪感の免疫がある私だが、彼らはダメ。]

一二

その部屋から、今登ってきた階段を通して、表の道路が見えた。

雲はあちこち断(き)れて、雨はすでに止んでいるらしい。道路はぼうと明るく、その向うに家が並んでいるのが見える。月が出ているのかも知れない。突風が乾いた音をますます強めてくる。揺れの点では階下よりもここが烈しいようだ。大浪に揺られる船の底みたいに、ぎぎっと軋み、かたむき揺れる。ロウリングのみならず、不気味なピッチングも加わる。[やぶちゃん注：「ロウリング」(rolling)「ピッチング」(pitching) 梅崎春生も主人公も元海軍兵（既に解員されている）であるから、自然にこうした表現が出る。船舶が海上を航行する場合、強風や波浪により、横揺れ（ローリング）や縦揺れ（ピッチング）、及びその他それらが複雑した動揺が発生する。ピッチングは前や後ろからの波風によって船首と船尾が恰もシーソーのように上下に揺れることで、ローリングは船体が横からの波風によって左右に揺れることを指す。]

突風のたびに無意識に身体が凝縮して、どうしても、柱にすがりつく姿勢になってしまう。闇の中でその都度(つど)、私の手が男の腕に触れ合ったりする。男の肌は濡れてつめたかった。

さっき板片をぶっつけた私の二の腕が、じんじんと熱い。ぬるぬるする。皮膚が裂けて、出血しているらしい。また眼鏡を飛ばされたとき、右耳のうしろを傷つけたと見えて、そこもじんじんと疼(うず)く。脈搏がそこに打っているのが判る。不整調で、早い。

部屋が悲鳴をあげてざわめき揺れる度に、男もはげしく柱にしがみついて来るようだ。掌や腕がぶつかり合う具合で、それは判る。嵐に恐怖をかんじてしることが、その動きで私に伝わってくる。触れた感じでは男の体軀は、私よりも細く小さいようだ。男の呼吸は鞴(ふいご)のように荒い。

突風のあい間に、私たちは短い言葉を交し合っていた。私からの発言や質問の方が多い。しゃべることで、相手や自分を確かめていないと、不安と恐怖で押しつぶされるような気がするのだ。顔かたちもまだ見知らぬのに、私はその男に、生物的な親近感をつよく保ち始めている。しかしそれは私の一方的な感じかも知れない。男の返事や話しかけには、もはや敵意はほとんど消えていても、まだ隔意の風情(ふぜい)が頑強にのこっているのだ。そこに異質のものが、こつんと感じられてくる。

「あんたも、兵隊かね？」
切迫しているので、言葉が長いセンテンスでは出てこない。そう訊ねながら、私はできるだけ衣嚢を身近に引きよせる。万一の場合の衝撃を、それで避けようとする下心からだ。こんなものが役立つかどうか。しかしその計算を離れて、ほとんど無自覚に私は動作している。
男はあらく息づくだけで、それには答えない。
次の風のあい間に、異様に緊張した声で、男は口をひらく。私に問いかけるともなく、独白ともつかぬ、中途半端なうわずった調子で。
「こ、ここは危いかな。外に出た方が、いいかなあ」
「外は駄目だよ」
私は次のあい間に、頼むように言う。
「ここよりは、もっと危いよ」
この男にいま駈け出されては、私もはなはだ困るのだ。そして実際、ここから見える仄白い道路に、いろんな形のものが、すばらしい速度で走り廻っているのである。板片や瓦のようなものだけでなく、相当な大きさをもっものまでが。
戸板や唐紙が立ったまま、何枚も何枚も、道路の上をトコトコと走って行く。ふしぎに倒れない。妖怪じみたおそろしさがある。そして急に速度を増して、宙天（ちゅうてん）に捲き上る。

一三

とにかくその男は、すこしずつ変であった。
変ではあるけれども、確かに変であると感じるだけのゆとりが、私にはなかった。
包囲する轟音がたちゆるむとき、好奇心や相手をたしかめたい欲望が、ふと皮膚や唇の上に戻ってくるのだが、次の瞬間に、それはばらばらにかき消されてしまう。
「どうぞ。――どうぞ」
音響と振動が通りすぎるのを、祈るような気持で待っている。そして短い小康がくる。電光が時々白っぽく流れる。
この家には、雨戸は立ててあるようだが、唐紙や障子などの建具は何もないようであった。手探りでも触れなかったし、稲光もそれらを照らし出さない。家具らしいものの形もない。しめっぽい臭いからしても、空家のように思われるが、そうすればこの男は何だろう。私と同じ境遇だろうと、漠然と私はきめているのだが（そう思うのが一番カンタンだからだ）、どこかしっくりしない。食い違ってくるものがある。しかしむこうでも、私をそんなに感じているかも知れない。なにぶん動顛（どうてん）の状態だから、感情や挙動が平常通りにゆく訳もないのだ。
（とにかく、とにかく、これが済んでから。――）
なにもかも後廻し、ひたすらその気持であった。戦争中やっと命を全うしてきたのに、やっと解放された当日に、はからざることになっては大変だ。是が非でも。是が非でも。私は衣嚢に肩を埋めてみたり、柱の方に身じろいでみたり、架空の圧力（がわら）にたいして、絶えず防禦（ぼうぎょ）の姿勢をととのえながら、神経だけで力んでいた。この家の屋根瓦をばりばりと持ち去る、

すさまじい音がする。壁の外側にも、重いものやするどいものが、ひっきりなしにぶつかってくるのである。

「――もう、駄目かも知れないぜ」

やがて闇の底で、男の投げ出すような声がした。

「もうそろそろ、今度は駄目らしい」

「駄目なもんか」

即座に私は答える。その言葉に引きずりこまれることから、懸命に抵抗しながら。――しかしそろそろ、この男が気持の隔てをなくしかけていることが、その語調から感じられた。

「そら、少し収まったようじゃないか」

「風向きが変る前に、ちょっと収まるんだ」と男が答える。「さっきから聞いているから、おれにはよく判るんだ」

突風がすこしとぎれて、余波みたいな雑然たる音響がごうごうと鳴っている。

「何か食うもの、ないか」

「あるよ、何かあるだろう」

私はあわただしく衣嚢を引きよせて、紐をまさぐる。紐が濡れてからみつき、なかなか解けない。中には今朝支給された弁当がある筈だ。少しして、男が言う。

「お前は、テンゾクか」

「え。テンゾクって何だい」

なにか賊みたいな意味かと、私は理解しかねていた。紐がやっと解ける。

「テンゾクさ。ほら」

男の説明で、やっと、転属だということが判る。この言葉は海軍では使わないから、耳慣れない。部隊から別の部隊へ変ることを意味するようだ。この男は陸軍の兵隊だ、と私は推知する。しかしそれにしても、少しずつ妙だ。何を考えているのか、と私はちょっと訝り思う。思うだけで、考えがそこから進まないのだが。男が探るような声を出してくる。［やぶちゃん注：諸記載を見るに、海軍では「転出」と言ったようである。］

「荷物持ってるんだろう、なあ、お前」

男の掌が暗がりの中で、私の衣嚢を手さぐっているのが感じられる。私の手がやっと衣嚢の中で、食物を入れた包みに触れた。胃のへんがぎゅっと収縮してくる。空腹感というよりは、空虚感にちかい。

指に濡れてべとべとしたものがくっついてきた。私はそれをいきなり口に持って行く。甘い。口腔の粘膜に、とつぜんその甘さは沁み入ってゆく。餡の甘さだ。航空糧食のお萩の粉末が、雨でどろどろに溶けて、餡粉と御飯にそっくり出来上っているのだ。外包がやぶれて、チューブからしぼり出るように、それがはみ出していたのである。

ふたたびひとかたまりの突風が、破裂するような音をたてて、斜めに空から舞い降りてきた。浪のように揺れる闇の中を、私は男の掌をあわててまさぐって、どろどろのお萩をおしつけてやる。そして私も忙がしく、自分の掌を唇に押し当てる。それだけが仕事のように。

（あいつはどうしているだろうな。あのミミズクの旦那は！）

航空糧食からの聯想が、ちらとそこに走る。子供に食べさせてやりたい、と言った老兵の

ぶよぶよした表情。

――その時、階段を通して見える道の向うに、白っぽい光芒がひらめして、小さな藁屋根の家の形が、くっきりと浮き上った。それはゼラチンのように、抵抗にはげしく慄えていた。と思うと、ぐにゃぐにゃと折れ曲って、無雑作に平たくなった。無声映画でも見るように、崩壊音もひびいて来ない。しかしおそろしい実感が、私を打ってきて、思わず全身が硬直した。

私は何か叫び声を立てたかも知れない。

おそらく、この突風だったのだろう。（と後で私は思うのだが）

この家から数町ほど離れた、あの新装の高鍋駅が、ほぼこの時刻に、轟然と倒壊していたのである。駅舎に残っていた少数の人々は、ほとんどその前に危険をかんじて、すべて身をもって退避していたのだが、その突風の寸前の小康時にふと気を許したとみえて、その中の二人ほどが、駅舎に遺棄した衣嚢を取りに、ふたたび駅に駈け入ったのである。崩壊は、それと同時であった、と言う。――そしてその不運な一人が、あのミミズクに似た老兵であった。（翌朝、私はそれを知った）おそらくは子供に土産の衣嚢を見捨てるに忍びなかったのであろう。

――しかし私はそのときは、そういうことも知らずに、大浪のように揺れる柱に片手でしがみつき、片手でしきりにお萩を摑みながら、瞼をかたく閉じていたのである。生きているという実感が、まもなく奪いさられるかも知れない。その瞬間を全身をもって恐怖しながら、その実感を保って行こうと努力するかのように、しきりにお萩の甘さを口いっぱいに押し込んでいたのである。

まだ甘い。まだ甘い。と口腔内にひろがる甘さを、舌と粘膜でドンランに確かめつづけながら。――

［やぶちゃん注：「数町」一町は百九メートル。

なお、私は非常に残念に思う。「おそらく、この突風だったのだろう。（と後で私は思うのだが）」（この前の一行空けは本篇で唯一の特異点である）と次の二段落は（厳密には、まず行空けはせず、さらに「――しかし私はそのときは、そういうことも知らずに、」の部分だけを変えて、「――私はそのとき、大浪のように揺れる柱に片手でしがみつき、片手でしきりにお萩を摑みながら、瞼をかたく閉じていたのである。生きているという実感が、まもなく奪いさられるかも知れない。その瞬間を全身をもって恐怖しながら、その実感を保って行こうと努力するかのように、しきりにお萩の甘さを口いっぱいに押し込んでいたのである。」とすべきであったと思うのである。これがあることで本作のコーダのリアルな映像としての衝撃が甚だ薄まってしまうことになるからである。］

一四

いつの間にか雲が断れ、月が出ていた。

あたりがぼうっと明るくなっている。

風威はまだ衰えない。ますます強い。難破船の船舶のように、ぎぎっと撓み揺れるこの部屋の、その内部の模様が、おぼろに見分けがついてくる。眼が慣れてきたのだと思ったら、ふと眼を上にやると、明り取りのちいさな天窓の彼方に、ぽっかりと月が出ている。血を塗ったような赤さだ。

「月が！」

十一二夜の月齢だ。ちぎれた海藻みたいな断雲がしきりに月面をかすめ飛ぶので、月そのものがぐんぐん走っているように見える。そしてこの部屋も月に引張られて、いっしょに走って行くようだ。と思うと、またひとしきり、風のかたまりがぐわんとぶつかってくる。たちまち部屋全体が、めりめりと慄えあがる。

私たちはいつか身体を寄せ合って、お互いを楯とするような形になっていた。そして風の合い間に、衣嚢に手をつっこんで、にちゃにちゃになったお萩を掴み出して、しきりに口に押しこんでいた。

「もう、ないのか、もう——」

男の声が、私をうながす。衣嚢の内側にべたべた付着した分をのこして、航空糧食のお萩もあらかた食べ終ったのだ。男の声はなにか切迫していて、私はぎょっとする。

「まだ、何か、あるだろう。食わせろや」

天窓からおちる月の明りで、私はその時初めて、このふしぎな相客の顔を眺めていた。男は裸の上半身をねじむけて、衣嚢をのぞきこむようにしている。その輪郭がはっきり判るほどは明るくない。ぼんやりと目鼻立ちがうかがわれる程度だ。うつむいたその顔の下辺が、へんに黒っぽく隈どられていると思ったら、眼を近づけてみると、それはおびただしく密生した無精髭である。私が黙っているので、男は急に顔をあげて、しかし言葉は哀願するような調子になった。

「なあ。おれは、腹へってんだぞ」

「腹がへっているって——」

当感したような語調になるのが、自分でもわかる。男の異常な食慾もへんに思われるし、受けとめかねるような気持である。

「あと、何かあったかなあ。あとは、生米と、カンヅメと——」

「あ、カンヅメがいいや」

男の声はとたんに生き生きとなる。若い響きを帯びてくる。うすぐらいので、年配もよく判別できないが、この男は私より若いのかも知れない。そして上半身をななめに曲げて、壁ぎわに腕を伸ばす。そこらにこまごましたものが、重ねて置かれてあるようだ。押えたような声で、

「早く、カンヅメを出せや。おれが、切ってやる」

姿勢をおこした男の右手に、細長いものが握られている。ゴボウ剣だ、と判るまでに、時間を要しない。彼は腕を曲げて、私に向ってそれをかざしている。催促するというより、威嚇するような姿勢だ。表情も定かでないが、何かすてばちな圧力を、私に加えてくるふうである。私はいささかむっとする。と同時に、不安にもなる。この男は、何者だろう。一体なにごとか。男の顔の角度がすこしずつ動いて、私の全身を睨め廻すらしい。私は身体を固くし

て、男を見返していた。
やがて男の手が、ふと下に下りる。そして気を許したような、とんきょうな声で、
「なんだ。怪我してるじゃないかよ。おまえ」
男の視線が、私の左腕におちているらしい。さっき防火水槽のそばで、何かに打ちつけたところだ。と気付いた時、とつぜんその部分がじんじんと熱くなり、するどい痛みがよみがえってきた。私は思わず、そこへ掌をやる。
濡れた服地が、そこだけベロリと破れている。指がいきなり、ぬるぬるした皮膚にふれる。血だ。血が乾かないまま、そこらを黒く濡らしている。指を触れた部分にヒリリと痛みが走る。
「待てよ。おれが直ぐ、緊縛(きんばく)してやっからな」
男の声は急になごやかになる。ふたたび壁ぎわに于を伸ばす気配で、
「どこで、ころんだんだ。え」
「何かにぶつかったんだよ、表で」
私は用心しながら、上衣をそろそろと脱いで、襯衣(シャツ)だけとなる。脱いだ服地はぞんぶんに水を吸って、じっとりと重い。襯衣も雨水と汗に濡れて、気味悪く肌にべたべたと貼(は)りついてくる。
「痛い」
私は思わず口に出す。男の指が乱暴に、油薬みたいなものを、傷口へなすりつけてきたのだ。そして黒っぽい布きれで、器用にそこらを緊縛する。しめつけられた傷口を、熱い血が鼓動をうって、じんじんと流れてゆくのが判る。男は布きれの端を、きりりと結び上げながら、低いささやくような声で、
「――お前も、兵隊だな？」
私はうなずいて見せる。しかし相手に通じたかどうかは判らない。
緊縛が済むと、私は素直な気持になって、衣嚢の中を探る。奥の方に固いものが、ごろごろと指に触れる。その二つ三つをひっぱり出す。そして男に手渡す。
私は柱にもたれて、ゴボウ剣の刃先が、カンヅメに突きささる音を、しばらく聞いていた。その音が、騒然たる風の音と、いきなり重なり合ってくる。ぎい、ぎぎっ、と部屋が歪む。私は柱に爪を立て、呼吸をつめる。階段口を通して、仄白い道路が眼に入ってくる。さっき崩壊した向いの家が、ごちゃごちゃした堆積となって、そのなかから、突風にうながされて、板片やブリキ板が、猛然と飛び立ってゆく。まるで無鉄砲な選手みたいだ。
「もう、駄目かなあ」
その危惧が、瞬間私をおびやかす。この家の柱や梁(はり)の軋りが、妙に疲れたような響きを帯びてきている。それがひどく気になるのだ。
[やぶちゃん注：「十二夜の月齢」いつもお世話になっている「暦のページ」で、昭和二〇（一九四五）年八月の月齢を見ると、それに当たるのは**十九日か二十日**になる。
「ゴボウ剣」刀身の長さと黒い色から通称された陸軍の「三十年式銃剣」のこと。明治三〇（一八九七）年採用。第二次世界大戦に於ける日本軍の主力銃剣である。]

「こりゃ、すごいや、お赤飯だぜ、おめえ」
男はふたたび柱のそばに、にじり寄ってきた。
部屋の広さは六畳ほどもあった。板張りの上に、ござが敷いてあるが、ひっきりなしに落ちてくる砂や壁土で、そこら一面がざらざらだ。家具も、道具も、なにもない。物置きみたいに、がらんとしている。がらんとした空間に、太柱がいっぽん突きぬけている。その柱の下にうずくまって、私たちは額を寄せ合い、カソヅメの赤飯を手掴みに、しきりに口に頬ばっていた。こんなお目出度くない状況で、お赤飯とはなにごとか。そんな思いが、ちらちらと私をはしる。しかし我が相客は、そんなことを考えもしないらしい。ただひたすら、食べている。食べることだけに、熱中している。その旺盛な咀嚼音が、すぐ側で聞えるので、それに追われるように、私も顎を動かしている。そしてふと感じたままを、そっくり私は口に出す。私のつもりでは、相手に親しみをこめた感じだったのだが。
「ずいぶん、食うじゃないか、お前」
ぎょっとしたように、男は柱から身を引く。そして私もはっと固くなる。男の右手がまさしく、ゴボウ剣を掴んでいたからだ。私は遽てて、言葉をつぐ。
「ど、どうしたんだよ」
「食って、悪いのか」
ひどく険しい声が、男の口から、はねかえってきた。二の句をつがせぬほど、その語調は激しい。しかしその激しさは、どこか空虚だ。私につっかかるというより、発作的に喚いたという感じがある。私は黙る。黙ったまま、無意識に身構える。そして男の動静に、全神経をあつめている。男の体軀は、私よりも細く、ひよわそうだ。しかしその右手に、ゴボウ剣を握って、私をねらっている。風がどどっと吹きつけると、男の身体もその形のまま、よろよろとゆらぐようだ。私も思わず片手をついて、動揺に抵抗する姿勢になる。
男の影が、すこしずつ、後ずさりするらしい。そして押しつけるような、ぶきみに緊張した声で、
「おめえ。どういうつもりで、ここへ来たんだ」
「雨宿り、だよ」
「なに。どこから、来たんだ」
「高鍋の駅、からだ」
「駅からだあ？」
男はひるんだような声を立てた。しかし直ぐ盛り返すように、甲高い声で、
「駅から、わざわざ、どんなつもりだい」
私は黙ってしまう。どんなつもりだったのか、私にも判らないのだ。むちゃくちゃに走り出したとたんに、皆を見失ってしまったのである。と思うけれども、しかしあの時、私は皆から意識的に離れたかったのではないか。そんな思いが、今ちらと頭をかすめる。とにかく独りに、なりたかったのではないか。しかし独りになって、私は一体、どうするつもりだったのか。

私が黙っているので、男はすこしずついらだって来るらしい。とつぜん乱れたような声になって、

「おめえは、いったい、誰だ。誰だよ」

ある疑念が瞬間に、私の胸に結実する。この男は、何かをおそれている。おそれていることで、極度に過敏になっている。――しかし次の瞬間、その疑念もたちまち断ち切れ、かき消されてしまう。身も心もすくむような音響とともに、突風がぐわんとぶつかってきたからだ。巨大な掌で、いきなりひっぱたかれるような衝撃。梁（はり）や柱や垂木（たるき）が、それぞれ終末的な悲鳴をあげて、不協和に騒ぎたてる。部屋全体が大きくぐらぐらと揺れ、どこからか砂や土塊（つちくれ）がばらばらと飛んでくる。私は脚をちぢめた昆虫のようになって、必死に柱に身体をおしつけている。その私のすぐ背後からおちてくる、物が引き裂けるような、すさまじい音響。

総身が凝縮するような気がして、思わず私はその音へ振り返っていた。

一六

私の背後の壁面の、柱と壁の部分がめりめりと引き裂けて、幅五寸ほどにも分離していたのである。

そこから風が棒になって、どどっと私の正面に殺到してきた。

あのアッシャア館の最後のように、その裂け目から月光がさし入り、無気味な音とともに、その月の光の幅が、しだいに拡がってくるのだ。全身の毛穴がけば立つような気持で、私はそれを見た。［やぶちゃん注：「アッシャア館の最後」アメリカの幻想作家エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe　一八〇九年～一八四九年）が一八三九年に発表したゴシック・ロマンの名篇「アッシャー家の崩壊」（*The Fall of the House of Usher*）。］

「大変だ！」

それからどういう風に、自分の身体が動いたのか、ほとんど自覚がない。とつぜん視界がむちゃくちゃに入り乱れ、そこらで音が鳴りはためき、私は衣嚢もなにも遺棄して、階段口まで来ていた。いつの間にか、汗でぬるぬるした男の身体を、私は右手でしっかり抱えていたようである。そしてそのまま転がり落ちるように、まっくらな階段を駈け降りていた。その瞬間壁面の一部が倒壊したと見え、むせるような壁土の臭いが、私たちを追っかけてきた。

腕で顔をおおいながら、私はやみくもに土間へ飛んで、表の方に駈け出そうとした。その私の肩に、男の両手がしがみついてきた。

「そ、そっちは、あぶないんだ」

私はたちまち判断力を失って、もろくも引き戻された。男のあらあらしい呼吸が、耳のそばに聞える。そして私は引きずられるように、柱や戸板に二三度ぶつかりながら、暗い土間を、裏手の方に走っていた。男の掌が私の肩を、しびれるほどきつく摑んでいる。出口の敷板に爪先をしたたか打ち当てて、私たちは嵐の中にころがり出た。

「は、はやく」

白っぽい月の光の下で、そこは裏庭のような広場になっているのだ。私たちはよろめきながら、そこを斜めに駈け抜けた。縄や木の板みたいなものが、顔や肩をかすめて飛ぶ。そし

て私たちは背を曲げて、裏庭のすみへ走った。低い土塀がそこで直角に折れている。その一角へ、呼吸をはずませて、私たちはころがり込んだ。

そこにしやがみこんだまま、私たちはものも言わず、眼だけを大きく見開き、しばらく犬のようにあえいでいた。

私たちが今飛び出した二階家は、ぼんやりした空明りを背景にして、奇怪な形にねじくれていたのである。二階の梁木がいっぽん外れて、軒からだらりとぶら下り、風にゆらゆらと揺れているのだ。と見る間に、それはもぎ取られたように軒端をはなれて、ふわりと中空を泳ぐようにして、向うの方に落下して行った。そのとたんに、屋根全体ががっくりと傾いて、屋根瓦が月の光をはじきながら、ざらざらとこぼれ落ちるのを、私はありありと目撃した。さいわい私たちの位置から、そこまで二十米あまりある。

ひとつの危険からのがれ得たという実感が、私にはっきり来るまでに、なお二三分はかかったと思う。やっと人心地ついたとき、衣嚢をあの二階に遺棄してきたことが、初めて意識にのぼってきた。

（これは大変だ！）

兵隊の本能がうごいて、先ずそれが頭にきた。次の瞬間、自分がすでに解員された身だと気がつくと、弛緩した笑いが私の咽喉にこみ上げてきた。

私は声を立てて、わらったのかも知れない。

一七

その時そばの男が、背をぐっと起したのだ。

そしていきなり私に向き直った。

「おれは、……だ」

「え？」

男の顔色はまっさおに見えたが、声は低く落着いている。私の顔を真正面から見据えながら、

「おれは、逃げたんだ。逃げてきたんだ」

男の身体には、土塀の影が黒々とおちているが、首だけがその影から抜けて、月光にしらじらと浮いている。汗が玉になって、その額や頬に光っている。涙かも知れない。蒼白い塑像のように、顔の筋肉が緊張している。その唇だけがわずかに動いて、呟くような声で、

「つまり、おれは、逃げなきゃ、よかったんだ。つまり――」

咄嗟にして、私はそれを了解した。この男の常ならぬ挙動。ふしぎな容貌の衰えなどのすべてを。ちょっとした沈黙の後、私は問い返す。

「――いつ、脱走してきたんだね？」

私は自分の声が、急にいやらしい猫撫で声になるのを感じる。そのことで私は、ふと自分を嫌悪する気特におちる。

なにか重大な立会人になることを拒否する気持が、私の内部ではっきり動いていた。しかし私は視線を、男の顔からそらさない。私の顔も、月の光に浮いている筈だ。そして私の額

にも、ぎらぎらと汗の玉が並んでいるだろう。
やがて男はがっくりと、背を土塀にもたせかける。そして力が抜けたように、こんどは素直な口調になって、とぎれとぎれしゃべり出す。急に元気を喪(うしな)ったことについて、何故か私はこの男に、憎しみに似た感情を持ち始めているのだ。そしてその感情をいらいらともてあましながら、しばらく私は口をつぐんでいた。
風威がしだいにその頃から、衰えてくる気配があった。

一八

農家風の低く厚い土塀が、私たちを風から守っているのだが、その土塀にぶつかる突風の震動が、すこしずつ間遠になってくるようであった。それと同時に、風に乗って土塀を越え、頭上をかすめ去る板屑(いたくず)などの数が、目に見えて減少してくるのが感じられた。決定的な音響がしだいに弱まり、余波みたいな雑然たる騒音となって、遠くに消えてゆくらしい。しかし時折、発作的な逆風が捲き起って、庭の水溜りをさあっと吹き上げ、しぶきを私たちに浴びせてくるのだが、それにしても颱風が峠をこしたことは、四囲の状況からも、もう疑えなかった。
張りつめていた緊張がとけて、妙に不安な下降感が私にやってきた。頭の一部に変に陽気な気分をのこしたまま、急にとろけるように睡くなってくる。疲労からくるひどい変調をかんじながら、濡れてざらざらした土塀に背をもたせ、この経験を知らぬ脱走兵の言葉に、私はうつうつと耳を傾けていた。そして神経的に手を動かして、地面の草をしきりにむしり取っていた。男の声は、低くみだれている。自分だけでしゃべっているような語調だ。ほとんど聞きとれないのである。
男のその呟きが、ふと途(と)切れる。そして私は初めて発言の機会をつかむ。強い抵抗がそこにある。それは何故だろう。彼の自由を告げるというのに、私の気特ははなはだしく残酷になっている。この上もない意地悪いことを敢行するような気分だ。私の内にあるもの、善意というより、はっきりした悪意であるようだ。おのずから不機嫌な口調となって、思いきって。
「だって、お前、もう戦争は、すっかり済んだんだぜ」
男の姿勢がぎゅっと凝縮するのが、はっきりと判る。男の刺すような視線を頬に感じながら、再びおっかぶせるように、
「――逃亡も、脱走も、あるもんか。みんな御破算だよ」
とつぜん男が笛みたいな叫びを立てたようだ。そしてそれっきり。立ち上ろうとして、またへたへたと腰をおろす。風がいろんなものを飛ばしてくるので、立ち上るのはまだ危いのだ。
風の音が、またひとしきり、潮騒(しおさい)のように押しよせてくる。いくぶん弱まってきたとは言え、まだこの厚い土塀を根元から、ずしんと震動させてくるのだ。私は膝を抱いて、じっとしている。そして感覚の全触手を、隣の男にあつめていた。男は死にかかった章魚(たこ)のように、無抵抗に壁によりかかったままでいるらしい。小刻みに慄えているのが判る。性急な息づか

いがつたわってくる。何か言いそうなものなのに、かたくなに黙り込んでいるのだ。
（ざまあみろ）
私も黙りこくったまま、ふとそう思ってみる。すると胸のなかの残酷な主調が、急に憐憫（れんびん）にとってかわるのを自覚する。この男にたいする憐憫ではない。もっと別の、なにものに対してとも知れぬ、叫び出したくなるような焦噪と憐憫。――そして一時に発してくる、深い疲労と倦怠。
私は月を見上げていた。いやらしい赤さで、それは中天に懸（かか）っている。ふいにかすかな嘔（は）き気がこみ上げてくる。そして咽喉（のど）の奥から、小さなアクビがつづけざまに出てくる。口の中がカラカラに乾いて、舌の根が引きつるように痛い。月の面のうすぐろい斑点を見詰めていると、やがて虚脱したような睡気が、ふかぶかとかぶさってくる。その誘（いざ）ないに応じるのが、今の私にはもっとも自然らしく感じられた。
「おれは、ちょっと、やすむよ」
そう言ったと思う。そして眼を半分見開いたまま、私は眠りに入ったらしい。神経の一部を残して、あとはすっかり喪神したように。
そしてどの位経ったのか、私にはよく判らない。一時間足らずのことだと思う。

一九

ニラの匂いがしていた。
「ニラだな」
「うん、そう」
「なつかしい匂い、だな」
「うん」
意識は醒（さ）めないのに、口だけが醒めて、隣の男と会話のやりとりをしていたようだ。寝言のつづきのような自分の返事で、私はぼんやりと目を醒ましていた。
気がつくと、風の音はずっとおだやかになっている。空の高みでコウコウと鳴っているだけで、地上ではほとんど収まったようである。
月の位置が移動したのか、私たちがいる土誹塀のかげも、すっかり白々と明るくなっている。そこらいっぱいに密生しているのが、ニラらしい。すべてなぎ倒されたように、ひらたく折れ伏している。その青く細い葉々の間から、白く小さな花が黙々とのぞいている。先刻私が無意識に、しきりにむしっていたのも、これらしい。その葉の折れ口から、ニラ特有の匂いが、ぷんとただよってくる。あの時は気がつかなかったのに、今は親しく鼻にのぼってくる。
「これ、タマゴとじにすると、とてもうまいぜ」
「うん。うまい」
男にならって、私も手を伸ばして、花をつけた細茎をもぎとっていた。そして何故ともなく、眼に近づけて見る。小さい花だ。六枚の白い花びら。六本の細い花芯（かしん）。ひとつの茎に、七つ八つのその花が、傘状にくっついている。そこらに月の光がちらちら揺れている。鼻に

もって行っても、ほとんど匂わない。強いて嗅ぎ当てようとするように、私はしきりに鼻を鳴らしながら、何となく考えている。

（この小さな花のことを、あとになって、何度も何度も、おれは思い出すだろう！）

やがて横で男の影が、ゆるゆると立ち上った。そしてなにか試すように、二三度足踏みしている。それを見上げながら、私はぼんやりと話しかけている。

「もう、行くのかい」

「うん。もう、大丈夫だろう」

「そりゃもう、大丈夫だろうな」

「もう大丈夫だよ」

「じゃ、おれも、行こうかな」

壁に掌をついて、やっとのことで、私も立ち上る。身体の節々がいたい。それと同時に、眠っている間に、自分の情緒がすっかり変化したことに、私はすこしずつ気付いている。この男の存在も、なにかよそごとみたいに、今は感じられるのだ。

男はややびっこを引きながら、庭をよこぎって、家の方に歩いて行く。ひどく無表情な背中だ。その背について、私も歪んだ家の中に入ってゆく。暗い土間の中途で、私は立ち止って、自分の声でないような声で、

「やはりおれは、ここでもう少し、休んで行くよ」

まだ眠いし、疲れてはいるし、動くのは大儀であった。外に出てもまだ暗いし、行くあてもない。濡れていない場所で、もう一休みしたかった。ひたすら、それだけである。

「そうかい」

男はちらとふり返る。そして無感動な声で、

「じゃ、アバよ」

「アバよ」

表通りの月光に、男の痩せた黒い影がうかび、ちょっと右手をあげる。そしてそのまま横へ切れて、私の一夜の同伴者の姿は、それっきり消えてしまう。私はただそれを見ている。無感動に見送っている。表皮が妙に硬化して、感動がうごく幅や余地が、胸のなかからなくなったような感じだ。やがて私は手探りで、ごそごそと框（かまち）に這い上る。

土や砂でザラザラした板の間のすみに、むしろみたいなものを探りあてる。肌にべたつく襯衣（シャツ）を脱ぎ捨て、そこへ横になり、私はゆっくりと背骨を伸ばす。そして瞼を閉じる。あとは朝を待つだけだと、自分に言い聞かせながら。——

二〇

朝の日光の下で、高鍋の駅前は、ざわざわと混雑していた。

一夜の晦冥（かいめい）がすぎると、嘘のように晴れ、風は凪ぎ、陽（ひ）はかんかん照り始めている。蝉（せみ）の声があちこちにむらがり響き、今日もまた暑くなりそうな天気である。空には雲ひとつ見えない。青々と澄みわたっている。嵐をすっかり忘れたような、素知らぬ表情だ。颱風の痕跡は、地上にだけとどまっている。道路や溝のあふれた雨水。なぎ倒された樹々。倒れた電柱。

地面を這う電線。倒壊した家屋。そこらを人々の姿が、縫うように動いている。
高鍋の駅舎も、まったく原形を失って、雑多なものの堆積（たいせき）になっていた。板片やガラスや瓦の破片が、そこらいっぱいに散乱している。巨大な掌で、一挙にぐしゃりと潰されたように見える。その上に、七八人の男たちが登って、ツルハシやシャベルで、その堆積を掘り起している。
「おおい。どうしたい」
駅前の待合所みたいな家の中から、私に呼びかける声がする。見ると、部隊で顔なじみになっていた、看護科の若い下士官だ。
「どうしたね。おや、眼鏡は？」
「うっかりしてて、飛ばされたよ」
「へえ。損害はそれだけかい。うまくやったね」
そして下士官は、わかわかしい声で笑い出す。笑いながらも、しきりに身体を動かして、薬品箱を開いたり、注射器の整理をしたりしている。その待合所の中には、五六人の男たちが、立ったり動いたりしている。国民服を着た、町の役員らしいのもいる。消毒薬の臭いがただよっている。下士官は倒壊した駅舎の方を、顎でしゃくりながら、
「どうだい。ひでえもんだろう」
待合所の土間に、戸板が二つ敷いてある。そしてその上に、二人の男が横たわっている。その一人は苦しそうにうめいている。あとの一人は、血の気をすっかり失って、瞼をじっと閉じている。私が見たのは、その男の顔であった。それは汽車で座席がいっしょだった、あのミミズクに似た老兵の顔である。皮膚が灰白色になって、表情も歪んだまま硬ばっているが、あの男の顔にまぎれもなかった。いきなり胸を衝かれたような気持で、私は口走る。
「どうしたんだい、これは」
思わず詰問的な口調となった。びっくりしたような顔で、下士官は私を見る。
「息引き取ったんだよ。さっき」
そして下士官は、器用に注射器に薬液をみたしながら、
「運が悪いやつだよ。この男は」
いったん駅舎から身をもって退避しながら、風の小康（しょうこう）時に、遺棄した衣嚢を取りに、ふたたび駅舎に入ったという。そしてその瞬間に、駅舎は轟然と倒壊したのだという。
「はたの者が、止めたというんだがな。なにしろ運が悪い男だよ」
そう言い捨てて下士官は、注射器を指にはさんで、もう一人の怪我人の方にあるいてゆく。
私は土間のしきい口に立ったまま、しばらく老兵の死貌（しにがお）に眼をおとしていた。戸板の枕許に、老兵のものらしい口に立ったまま、しばらく老兵の死貌に眼をおとしていた。戸板の枕許に、老兵のものらしい衣嚢が、泥によごれて置いてある。この衣嚢の中に、子供の写真や、子供へ土産の航空糧食が、ぎっしり入っているのだろう。しかしこれがこの男の生命の代償としては、あまりによごれて、あまりにも惨めに変形している。泥と布のかたまりのような、その衣嚢をじっと見ていると、私はやはり急に耐え難くなってくる。しかし私にも、どうするすべもないのだ。私に判るのは、ただそれだけである。
駅前や道路で、呼び交す声や別れを告げる声が、遠く近くひびいている。ぞろぞろと人が動いている。次の駅まで、皆徒歩であるくのだ。着のみ着のままの男。衣嚢を重そうにかつ

いだ男。どこからか大八車をやとってきて、それに荷物を運ばせている一群。それらの上に、晩夏の太陽がかっと照りつけ、人々の濡れしめった衣服から、白く水蒸気が立ちのぼっている。ものや人の影が、地上に鮮かに動いている。日を背に受けて私の影も、私の足許から濡れた地面に、平たく黒々と伸びているのだ。このいやらしい影を、えいえいと引き摺(ず)って、やがて私も次の駅まで、三里の道を歩かねばならぬことは、確実であった。